

成熟期に入ったFDG-PET ——PET/CTの臨床的有用性と可能性を中心に

企画協力：村上康二

慶應義塾大学医学部放射線科学教室教授

2002年に保険適用となったFDG-PETは、2010年度の診療報酬改定で適用疾患が拡大され、早期胃がんを除くすべての悪性腫瘍が対象となった。今後改めて、臨床現場におけるエビデンスに基づくFDG-PET検査の十分な活用が求められていくと思われる。そこで、本特集では成熟期に入ったと言えるFDG-PETが、CTやMRIに代表される多くの競合モダリティの中で、どのような役割を果たせるのか、新たに保険適用となった疾患を中心に適応と有用性について検討する。さらに、新しい撮像技術やポストFDGなど新たな薬剤、次世代PET装置などのこれからの展開、そしてPETがん検診やFDGデリバリーシステムの動向なども含めて、FDG-PETの可能性を報告する。

**Nuclear
Medicine
Today
2010**

I プロローグ（総論）

FDG-PETをめぐる変化と進化 ——臨床面、技術面、研究面からの考察

村上 康二 慶應義塾大学医学部放射線科学教室

FDG-PET検査が、2002（平成14）年度に保険適用となってから本年度で8年が経過した。この間、2004年度にはデリバリーFDGの保険適用、2006年度には保険適用疾患の拡大など、PETの臨床応用は次々と進み、今年2010年4月の診療報酬改定により“ほとんどすべての悪性腫瘍”に適用が拡大されるに至った。悪性腫瘍であっても治療効果判定目的では保険が適用されない、また、原発不明熱も保険適用外であるなど、いまだに問題点もいくつか残っているが、保険償還の点

からはほぼ満足のいく内容となったものと言える。

FDG-PET検査が初めて保険適用となった8年前からいまでもPETが急速に普及した発展期ととらえると、悪性腫瘍全般に使用可能となった今後は成熟期ととらえることができる。

本特集では、新たな段階に入ったFDG-PET検査について、改めて臨床面、技術面、そして研究面で見直し、最後に、薬剤面での将来展望を各分野のエキスパートに述べていただく。

診療報酬適用拡大で何が変わるか

核医学関連では、2010年度の診療報酬改定により大きく2点が変更された。

その1つは、放射線同位元素（RI）内用療法関連である。従来は甲状腺疾患だけに適用されていた内用療法管理料が、骨転移の疼痛緩和、そして、非ホジキンリンパ腫へも適用が広がり、さらに点数も大幅に改善された。これは、将来的にRI内用療法が普及する上で大きな進歩と言える。